

全国歴史教育研究協議会第 55 回研究大会(大阪大会)報告

寒川高校 澤野 理

はじめに

標記大会は、「連携 ― 新たな歴史教育歴史教育の模索」を大会基本テーマとして、2014 年 7 月 30 日(水)から 8 月 1 日(金)までの 3 日間、大阪国際センターを会場に開催された。大会参加者は、約 230 名で、神奈川からは筆者を含めて 8 名が参加した。以下、本稿では、大会の概要と筆者の感じた問題点について簡潔な報告をしたい。

1 基本テーマと大会の構成

神奈川の歴史分科会で「連携」といえば、高大連携をはじめとする校種間連携が真っ先に頭に浮かぶ。実際、これが昨年度(2013 年度)好評を博した全歴研神奈川大会のベースとなっていた。今年度の大阪大会では、それに加え「科目間・教科間連携」、「博学連携」、などさまざまな「連携」がテーマとなった。それゆえ、初日が第 2～第 5 分科会に分かれたテーマ別発表、2 日目が第 1 分科会(シンポジウム)と記念講演、3 日目が史跡見学という大会の全体構成こそ従来同様だが、分科会は、従来の日本史・世界史という区分ではなく、連携の類型に応じて設定された。具体的には、第 2 分科会(科目間・教科間連携)「開かれる歴史風景―教科・科目の壁をこえて」、第 3 分科会(校種間連携)「つなげあう教育のありかた―異校種の生徒に対する教師の眼差し」、第 4 分科会(博学連携)「学校と博物館―多様な連携」、第 5 分科会(歴史一般)「歴史への多様なアプローチ」というものであった。

筆者の出席した第 5 分科会は、今大会の中ではオーソドックスな実践報告を扱い、①「ジェンダーの視点から読み解く「民衆を導く自由の女神」(西洋近代史)・②「16 世紀東アジア海域世界の授業」(近世海域アジア史)・③「映画『もののけ姫』を通して学ぶいくつもの「日本」(中世日本史)と題材する 3 本の報告があった。報告①は、ドラクロワの有名な絵画を題材に生徒に絵解きをさせたという実践報告で、ジェンダーの視点を盛り込んだ点に新しさがあるといえる。ただし、絵画資料を用いてこの時代を(どんな観点を重視するにせよ)教える際には、素材を 1 点に絞らない方が生徒のより多様な解釈を導き出せるのではないかと感じた。報告②は、近年注目されている海域アジア史をコンパクトにまとめたもので、日本史・世界史の双方に応用できる内容であった。報告③は、創作映画を素材に中世の日本を教科書から異なる観点から捉えようとする試みで、網野善彦の歴史観に依拠して授業を構成しているように見られた。しかし、世界史の教員が言うのも何だが、『もののけ姫』＝網野の歴史観と短絡的に結びつけてよいかという疑問は若干残った。

2 シンポジウム

大会 2 日目午前のシンポジウムは、「連携 ― 教室にとらわれない歴史」と題してイスラーム世界を研究対象とする学術振興会の特別研究員、歴史番組制作に係わる NHK ディレクター、歴史博物館学芸員の 3 者をパネリストとして、歴史教育や歴史研究に対するそれぞれの立場からのコメントが語られた。それらのうち、筆者が違和感を覚えたのが学術振興会特別研究員の提起した問題である。彼は、近年「オタク」や「萌え」といった言葉であらわされる歴史系サブカルチャーの隆盛は、歴史教育や歴史研究にとってあまり有益ではないという趣旨の発言をしたが、本当にそう断じてよいのであろうか。大学の研究者→郷土史家・学校教員といった垂直的なヒエラルキーの中に学問と教養の基盤を求

め、それが失われた現代の社会について嘆くのは、(筆者のような)勉強の苦手な生徒に係わる現場で教える教員の実践そのものを否定することになるのではないかと感じた。無論、「オタク」や「萌え」で止まることでよしとするわけではないが、少なくとも「連携」というテーマで開いたシンポジウムであるのなら、パネリストは連携相手のことを、ある程度認識してから発言すべきではなかろうか。

3 記念講演

大阪大学大学院文学研究科の秋田茂教授による「1930年代のアジア国際秩序 — 大阪から考える世界史」と題する講演。1930年代の綿工業を軸にその日本における中心であった大阪とイギリスとの関係についてグローバルヒストリーの視点から講演され、高校の日本史・世界史の双方で扱える内容であり、ご当地大阪ということもあってか、神奈川での講義以上に教授の熱い語りが印象に残った。

4 史跡見学

大会3日目の史跡見学は2コース設定され、筆者の参加した大阪南部コースでは、大阪歴史博物館、堺市役所(大仙陵古墳群)、大阪府立弥生歴史博物館(池上曾根遺跡)などを見学した。

おわりに

意外なことであるが、大阪で全歴研の大会が開催されたのは今回が初めてとのことで、スタッフ諸氏の苦労は並大抵のものでなかったと拝察される。それゆえ、筆者が大会や報告に対して感じた問題点は、ある面「ないものねだり」なのかも知れない。今後は、本大会でデビューした若手の先生方や、同じく世代交代の進んでいる神奈川の歴史分科会の若手の先生方の活躍をサポートする決意を新たにすることを表明することで本報告を結びたい。



史跡見学 大阪南部コース 「池上曾根遺跡」



堺手織緞通の作品